

日本の2011年度及び2012年1～3月期の貿易動向

2011年度の輸出は名目で3.7%、実質で1.2%縮小。東日本大震災に伴うサプライチェーン途絶に加え、円高や世界経済減速、タイ大洪水の悪影響も受けた。地域別には、分業体制が構築されているアジア向け輸出において、サプライチェーン途絶の悪影響が大きく、減少率が大きい。一方、輸入は資源価格上昇の影響により11.6%の大幅増加を記録。輸入額が輸出額を大きく上回り、2011年度の貿易収支は4.4兆円と過去最大の赤字に。

2011年度の貿易収支は過去最大の赤字

2011年度の日本からの輸出額は速報ベースで、2010年度から3.7%縮小の65兆2,819億円となった。減少には、言うまでもなく、3月の東日本大震災によるサプライチェーン途絶が、最も大きく影響している。

6月以降、輸出は急ピッチの回復へ転じたが、夏場からの一層の円高進行や世界経済減速、タイ大洪水による再びのサプライチェーン寸断によって、水を差された。2012年1～3月期には復調の兆しを見せたものの、落ち込みを取り戻すには至っていない。一方、輸入額は前年比11.6%と大幅に増加し、69兆6,920億円を記録した。輸入額が、輸出額を大きく上回り、貿易収支は4兆4,101億円の赤字に転落した。これは過去最大の赤字である。

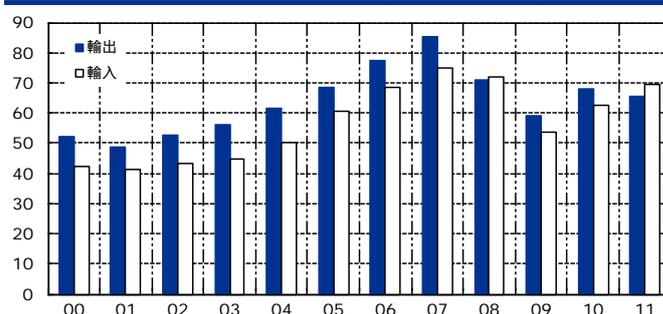
資源価格の上昇が貿易赤字の主因

輸入額の増加率11.6%を要因分解すると数量（実質）ベースの増加は3.6%Ptの寄与にとどまり、デフレターつまり価格上昇の影響が8.0%Ptを占めている。かつ鉱物性燃料の価格上昇の影響が7.6%Pt、金額ベースでは4兆7千億円超に達する¹。つまり、鉱物性燃料の価格上昇なかりせば、貿易収支は黒字であったとも言える。但し、鉱物性燃料の価格上昇にも関わらず、そうした燃料輸入量を削減できないという、福島原発事故後の日本のエネルギー事情に根本的な原因があるのは言うまでもない。

当面は貿易赤字の継続が避けられない

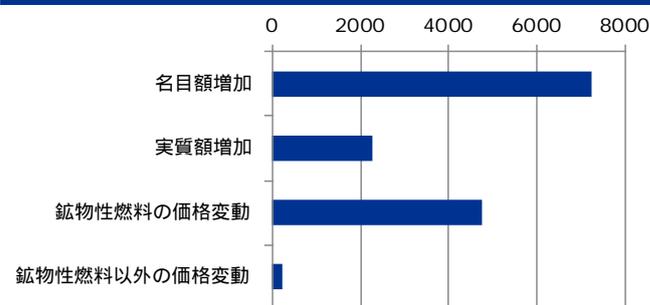
2011年度終盤に、輸出額は持ち直しの動きを示した。

日本の貿易額推移（年度、兆円）



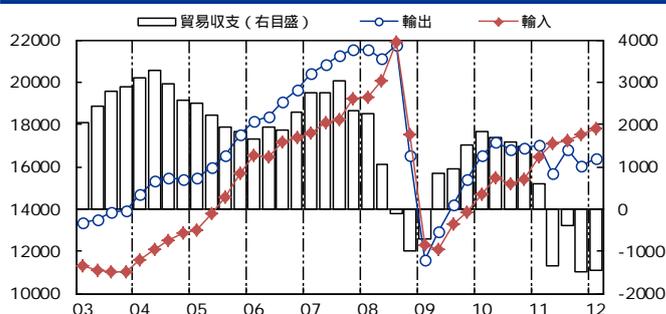
(出所)財務省

2011年度輸入額増加の要因分解（10億円）



(出所)財務省、日本銀行

名目輸出入の推移（10億円、季調値）



(出所)財務省、日本銀行

¹ 2005年基準の実質輸出入を試算して算出。

しかし、原発停止や資源価格動向を踏まえれば、輸入額は高水準の推移が避けられず、2012年度入り後も貿易赤字は継続する見込みである。貿易赤字が縮小傾向に転じるのは、円安による数量ベースの輸出押し上げ効果が顕現化し、かつ世界経済の回復も明確化してくることで、輸出が勢いを増す2012年半ば以降になるだろう。その後、2012年度下期のいずれかのタイミングで黒字転化が視野に入ってくる。但し、2012年度合計で貿易収支が黒字を確保できるかは微妙なところである。

仕向け地別の輸出動向

以下では2011年度の輸出動向について、2012年1～3月期を中心に、当社試算の実質ベースにより振り返る。

1. 対世界 2010年度 18.3% 2011年度 1.2%
 10～12月期前期比 2.1% 1～3月期 2.4%

実質輸出総額は2011年度に前年比 1.2%と小幅減少した。円高による目減りが除かれるため、名目ベースの 3.7%よりも減少ペースはマイルドである。東日本大震災の影響など2011年中の動向については、過去のレポート²に譲り、輸出の最近の動きを見ると、世界経済減速や円高、さらにはタイ大洪水の影響によって、10～12月期に前期比 2.1%と減少した後、1～3月期は2.4%と再び増勢に復帰した。1～3月期の増加には

米国を中心とした世界経済の下げ止まりに加え、タイ大洪水により寸断されたサプライチェーンが復旧した効果、タイの復興需要が影響している。

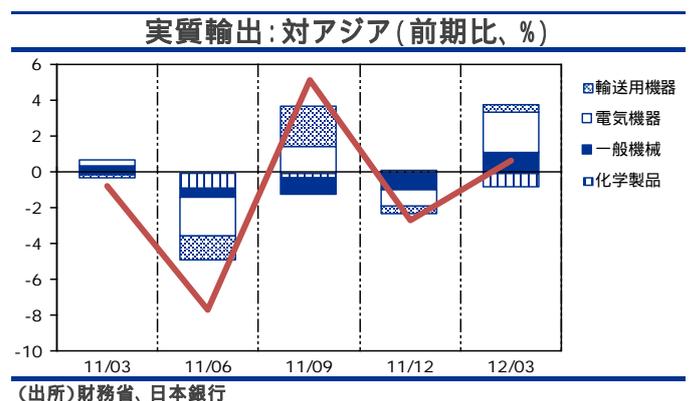
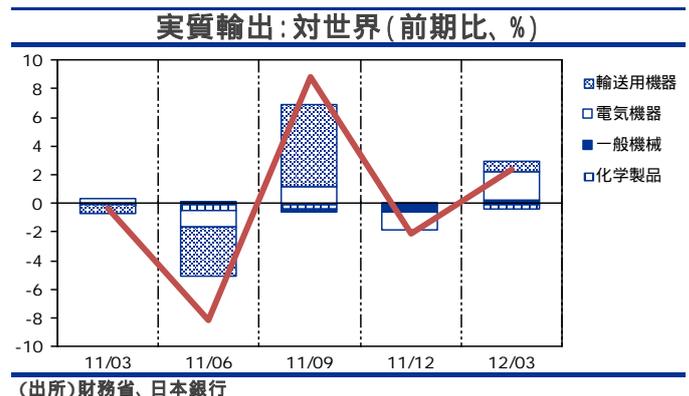
1～3月期を品目別に見ると、米国向けやASEAN向けの増加により自動車が主力の輸送用機器が前期比2.8%（10～12月期0.4%）と3四半期連続で増加、サプライチェーン復旧により電気機器が8.5%（10～12月期5.4%）と反発、タイ向けを中心に資本財などの一般機械も1.3%（10～12月期2.7%）とプラスに転じている。

2. 対アジア 2010年度 19.7% 2011年度 3.3%
 10～12月期前期比 2.7% 1～3月期 0.7%

アジア向け輸出は2011年度に前年比3.3%と大幅に減少した。これは主要地域向けでは、米国向けやEU向けを上回り、最大の減少率である。日本とアジアにおける分業体制の深化が、皮肉にも、二度のサプライチェーン途絶により、大幅な輸出減少に繋がったと考えられる。加えて、2011年度後半には、中国での在庫調整も日本からの輸出減少に寄与した模様である。

日本とアジアの間の分業体制を映じて、化学製品（10.3%）や非金属鉱物製品（12.1%）や金属製品（7.9%）といった生産財の落ち込みが顕著なことが、2011年度のアジア向け輸出の特徴である。

最近の動きを見ると、10～12月期に前期比 2.7%と減少の後、1～3月期は0.7%と小幅ながら増加に転



² 2月3日付 Economic Monitor「日本の2011年貿易動向」を参照。

じている。生産財輸出の回復は遅れているものの、資本財や消費財が持ち直し、全体を押し上げた。

(1) 対中国 2010年度 21.8% 2011年度 4.0%

10~12月期前期比 3.5% 1~3月期 0.4%

中国向けは2011年度に前年比 4.0%と低迷した。内訳を見ると、投資抑制の動きを受けて一般機械が大きく落ち込んだがほか、サプライチェーン途絶と中国国内での在庫調整を映じて、素材関連も振るわない。また放射能汚染問題により食料品輸出が 48.0%と劇的に落ち込んだ影響もある。

最近の動きを見ると、中国向け輸出は、10~12月期に前期比 3.5%と落ち込んだ後、1~3月期は 0.4%とほぼ下げ止まっている。素材関連は未だ低調だが、消費財や資本財など最終財について、下げ止まりの動きが確認できる。今後は、中国政府の景気下支え策により、日本からの輸出も緩やかな回復へ向かう可能性が高い。

(2) 対ASEAN 2010年度 20.3% 2011年度 2.8%

10~12月期前期比 4.7% 1~3月期 9.5%

ASEAN向けは2011年度も前年比 2.8%と小幅ながら増加した。こうした底堅い推移は、1~3月期にタイ向けの資本財輸出が膨らんだ影響もあるが、堅調な域内の消費と日本企業の進出加速が主たる背景と考えられる。品目別に見ると、2011年度は輸送用機器（前年比 15.5%）や一般機械（9.4%）の拡大が目立つ。

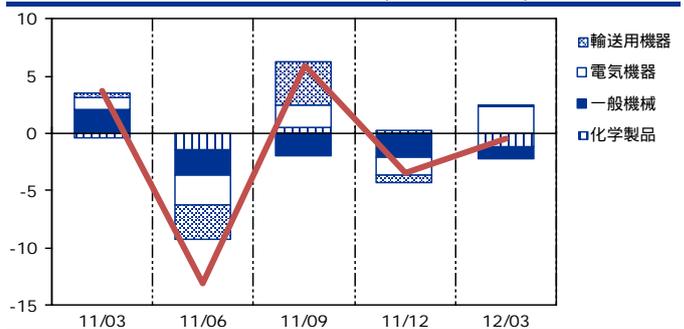
2011年度後半の動きを見ると、世界経済減速に加え、タイの大洪水の影響もあり、10~12月期に前期比 4.7%と落ち込んだ後、サプライチェーン復旧とタイの大洪水からの復興のための資本財特需により、1~3月期は 9.5%の大幅増加に転じた。1~3月期を品目別に見ると、サプライチェーン復旧を受けて電気機器（10~12月期 4.5% 1~3月期 15.3%）や輸送用機器（0.8% 6.4%）、金属製品（6.4% 9.5%）が伸びたほか、特需により一般機械が 26.3%（10~12月期 3.3%）と急増している。

(3) 対NIEs 2010年度 14.8% 2011年度 7.1%

10~12月期前期比 3.7% 1~3月期 1.9%

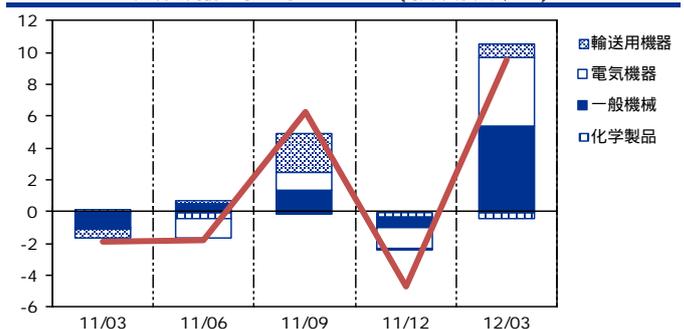
NIEs向けは2011年度に前年比 7.1%と大きく落ち込んだ。NIEs向けが、ASEAN向けに比べて低調なのは、深刻な生産調整に見舞われたIT・デジタル関連が輸出に占める割合が高いためである。世界的な生

実質輸出：対中国（前期比、%）



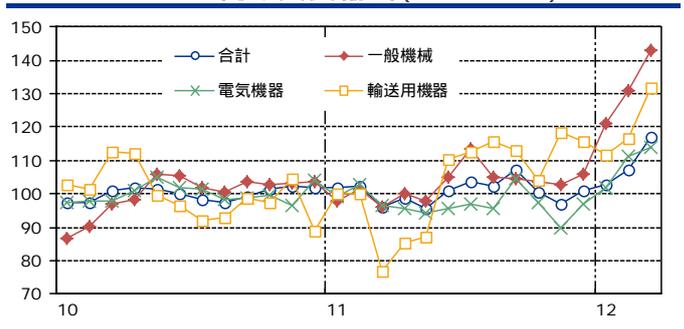
(出所)財務省、日本銀行

実質輸出：対ASEAN（前期比、%）



(出所)財務省、日本銀行

ASEAN向け実質輸出（2010=100）



(出所)財務省、日本銀行

産調整を受けて、電気機器（ 5.9%）や化学製品（ 7.8%）などの生産財輸出が落ち込んだほか、IT 関連の設備投資見送りにより一般機械の輸出（ 8.3%）も低調だった。

四半期で見ると、10～12 月期前期比 3.7%、1～3 月期 1.9%と減少こそ続いているものの、その減少ペースはやや和らぎ、月次で見ると2 月前月比 0.9%、3 月 0.4%と2 ヶ月連続の増加である。IT・デジタル分野の生産調整は完全に終了とまでは言えないが峠は越した模様であり、電気機器輸出は1～3 月期に3.2%（10～12 月期 2.9%）と増加に転じた。4～6 月期以降は、NIEs 向け輸出も下げ止まり傾向が明確になってくると考えられる。

3. 対米国 2010 年度 16.1% 2011 年度 2.6%
10～12 月期前期比 4.1% 1～3 月期 4.1%

米国向け輸出は2010 年度、2011 年度と2 年連続で増加し堅調である。自動車を中心とする輸送用機器輸出は東日本大震災に伴うサプライチェーン途絶の悪影響を受け4～6 月期に大きく落ち込んだものの、7～9 月期以降に回復し、2011 年度では1.7%と小幅ながら増加を確保した。また、米国経済の回復を背景に、電気機器（2011 年度 5.8%）や一般機械（10.5%）、金属製品（10.3%）など他の品目が増加した影響も無視できない。

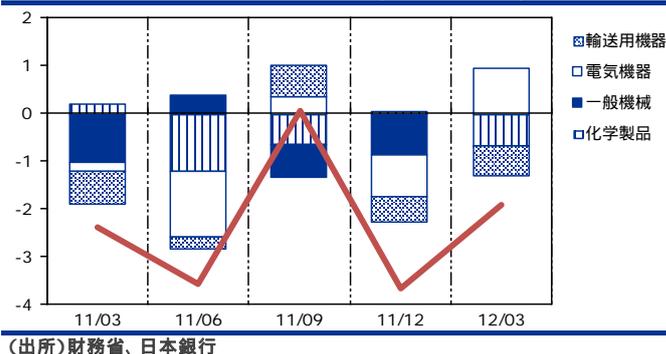
四半期で見ると、7～9 月期前期比 16.6%、10～12 月期 4.1%、1～3 月期 4.1%と3 四半期連続で増加し、引き続き底堅く推移している。1～3 月期は輸送用機器（前期比 3.9%）に加え、電気機器（13.7%）の拡大が目立った。

4. 対 EU 2010 年度 13.8% 2011 年度 0.7%
10～12 月期前期比 8.3% 1～3 月期 0.2%

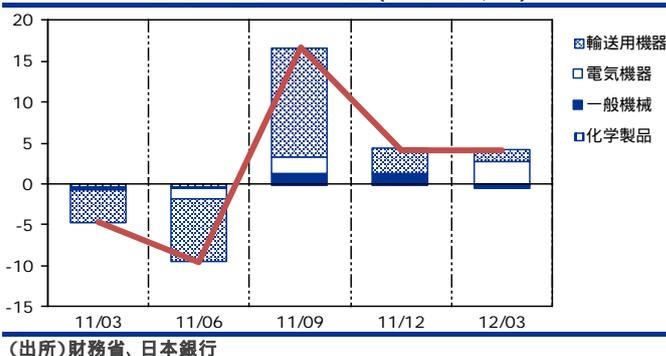
EU 向け輸出は2011 年度に前年比 1.2%と小幅減少した。減少率が比較的小幅なのは、アジア地域などに比べサプライチェーン途絶の影響が小さいためと考えられる。EU 向け輸出は、域内の最終需要に依存する部分が多い。

四半期別には、10～12 月期に前期比 8.3%と大きく落ち込んだ後、1～3 月期も 0.2%と横ばいにとどまった。月次ベースで見ても、1 月に増加の後、2 月と3 月に前月比で5%超の減少を記録しており、未だ、EU 向け輸出の回復は見通せない。1～3 月期については、自動車が主力である輸送用機器の落ち込みが前期比 16.9%（1～3 月期 0.5%）と厳しい。

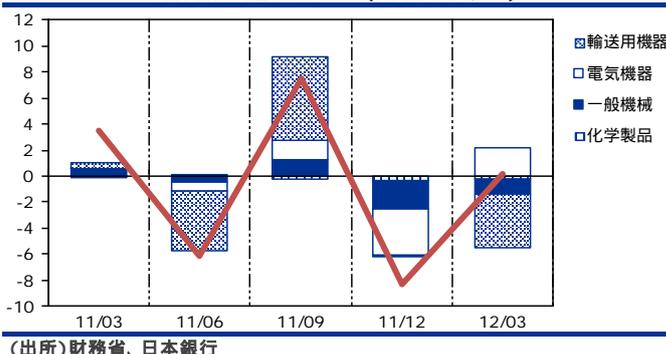
実質輸出：対NIEs(前期比、%)



実質輸出：対米国(前期比、%)



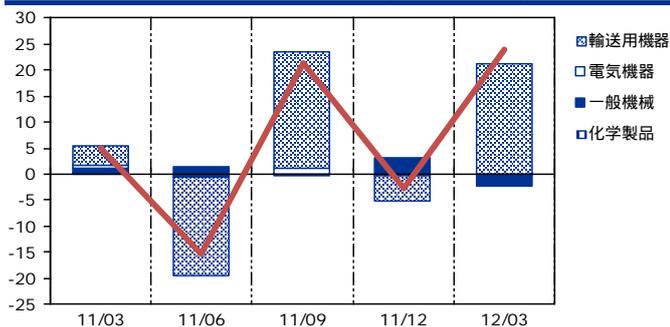
実質輸出：対EU(前期比、%)



- 5. 対中東 2010 年度 3.5% 2011 年度 0.6%
 10～12 月期前期比 2.7% 1～3 月期 24.0%
- 6. 対ロシア 2010 年度 138.2% 2011 年度 23.6%
 10～12 月期前期比 9.6% 1～3 月期 20.3%

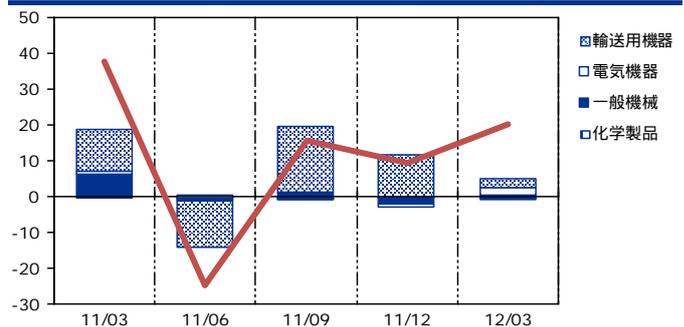
中東向けとロシア向け輸出は、いずれも過半を自動車占める。その自動車セクターが、東日本大震災に伴うサプライチェーン途絶の影響を強く受けたために、両地域向けの輸出は共に 2011 年度に減速もしくは減少に転じた。なお、ロシア向けが減速したとは言え、二桁増加を確保する一方、中東向けが減少に転じているのは、両地域の成長率推移³が一因と考えられる。

実質輸出：対中東(前期比、%)



(出所)財務省、日本銀行

実質輸出：対ロシア(前期比、%)



(出所)財務省、日本銀行

³ IMF の 2012 年 4 月 WEO によると、中東地域 (MENA) の成長率は 2010 年 4.9% が 2011 年は 3.5% 減速する一方、ロシアは 2010 年と 2011 年共に 4.3% 成長を確保。